

2026
2.28
No.102

日韓国交正常化
60周年記念行事報告

公益財団法人

日韓文化交流基金 NEWS



あなたも架け橋

公益財団法人

日韓文化交流基金

THE JAPAN-KOREA CULTURAL FOUNDATION

日韓国交正常化60周年にあわせてロゴマークを一新しました。「架け橋」をイメージした新ロゴマークには、事業に携わってくださる参加者の皆さまご自身が日本と韓国をつなぐ架け橋であるというメッセージと、両国間のさらなる交流の拡大への思いを込めています。

CONTENTS

- 1 新ロゴマーク紹介
- 2-3 活動紹介・事業実績
- 4-6 日韓国交正常化60周年記念行事
 - ・シンポジウム「朝鮮通信使という『智恵』」
 - ・講演会「日韓国交正常化60周年と日韓交流」講師：西野純也さん
 - ・講演会「隣の国の人々と出会う～私と韓国」講師：斎藤真理子さん
 - ・トークセッション「国交正常化60周年とこれからの日韓交流」
- 7-10 青少年交流事業報告
 - 【大学生交流事業】韓国青年訪日団第1団（テーマ：福島と北海道における日韓交流）
 - 【教員交流事業】後続交流への広がり
 - 【高校生交流事業】職業系高校に通う生徒たちの交流（テーマ：農業）
 - 【大学生交流事業】日本国外務省・大韓民国外交部主催 相互派遣事業
- 11 活動報告 JKAF（Japan Korea Alumni Forum）大学生訪韓団OBOG組織
- 12 事業報告

公益財団法人 日韓文化交流基金

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 プライム水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 fax. 03-6261-6780

<https://www.jkcf.or.jp>



Web



Facebook



X



Instagram



公益財団法人日韓文化交流基金

事業実績

1983～2026.3月



日韓文化交流基金は、「日韓両国民間の人的交流、学術・文化交流の推進と相互理解の深化」との目的の下、各種の事業を実施しています。設立以来これまでの主な事業の実績とその概要は下記の通りです。

※2026年2月現在の延べ実績（2026年3月実施見込事業含む）

青少年交流事業

大学生、高校生、若手教員等が参加

45,106名

訪日団参加者

30,851名

訪韓団参加者

14,255名

※2025年度実績：訪日 687名、訪韓 359名含む



フェロ-シップ（相手国滞在型研究支援）



訪日研究者

721名

訪韓研究者

100名

※2025年度実績：訪日14名、訪韓2名含む

人物交流助成（草の根交流支援）

1,490件

※2025年度実績：32件含む





青少年交流事業

日韓両国の大学生・高校生・社会人(若手教員など)を対象に、訪日団の招へい及び訪韓団の派遣事業を実施しています。日程中、学校訪問やホームステイといった行事を通じて同世代はもとより世代を超えた多様な人々と直接交流することで相手国をより深く知っていただくことを目的としています。

事業実施後にはフォローアップとして、訪日団及び訪韓団の参加経験者たちが同窓会組織を発足させ、みずからの参加体験を生かした活動を継続して行っています。

若手教員を対象とした訪日・訪韓団事業は、先生方同士の交流が事後にそれぞれの生徒同士の交流につながり、日韓の教室を同時に結んでの共同授業、さらには姉妹校交流にまで発展した例も出てきています。

各事業レポートはこちらから



フェローシップ制度

フェローシップ事業は、日韓両国国民間の友好・協力関係を促進する取り組みなどをテーマとした研究活動に対する支援を通じて日韓の知的対話を促進し、両国の学術文化の発展に資することを目的としています。

そのため日韓両国の若手・中堅世代の有識者ならびに優れた研究者などを、日本に招へい、また韓国に派遣し、調査・研究等の活動を行う機会を提供しています。

詳細はこちらから



助成制度

人物交流助成は、民間レベルで実施される日韓両国国民・団体間の交流を支援する制度です。両国間の草の根レベルでの交流をより活性化・多様化し、すそ野を拡大することを目的としています。

詳細はこちらから



講演会・シンポジウムなど

韓国・朝鮮研究の専門家の方々に講師を招き、それぞれの専門分野や日韓関係を主題とした一般の方々向けの講演会を年に数回開催しています。

他にも、朝鮮通信使をテーマとしたシンポジウムや、日韓の若い世代が両国間交流について意見を交わすトークセッションなどのイベントも実施しています。



会議事業

長い歴史の中で共に歩んできた日韓両国が、これからもさらに協調と相互理解を深めていくためには何が必要か。このような観点から、日韓両国の人文社会科学分野の専門家が集い会議を開催しています。

当基金では「日韓歴史家会議」「日韓歴史共同研究委員会」「日韓新時代共同研究プロジェクト」などの事務局を担ってきました。

詳細はこちらから



日韓国交正常化60周年記念行事開催

日韓国交正常化60周年記念事業として、
それぞれ異なるテーマのシンポジウム、特別講演会、トークセッションを開催しました。

日韓国交正常化60周年記念 シンポジウム「朝鮮通信使という『智恵』」

5月31日、日韓国交正常化60周年記念事業 シンポジウム「朝鮮通信使という『智恵』」を東京都内で開催しました。会場とオンラインを合わせて163名が参加し、石破茂内閣総理大臣（当時）からも朝鮮通信使に学ぶことの意義を強調するメッセージが寄せられました。

第1部では近世の日朝関係のシンボリック的存在である朝鮮通信使に関して、4人の研究者がそれぞれの専門の立場から発表を行いました。



「朝鮮王朝の政治システムと通信使」

発表・問題提起

吉田 光男 氏(東京大学名誉教授・放送大学名誉教授)

近世の日本と朝鮮は、朝鮮通信使という外交システムにより平和で安定した隣国関係を保っていたが、そこにはあまり知られていない政治テクニックが働いていた。本日のシンポジウムでは、4人の専門家の発表を通じて、朝鮮王朝の政治システムや江戸幕府の思惑など、朝鮮通信使の背景にあった「智恵」に迫ってまいりたい。

「朝鮮通信使と対馬藩の役割」

発表

田代 和生 氏(慶應義塾大学名誉教授)

これまでの朝鮮通信使研究とは多少異なる視点から、日朝関係の安定に大きく貢献した対馬藩の役割にあらためて注目したい。江戸時代260年間続いた円滑な日朝関係は、同藩の細やかな配慮と工夫の賜物ともいえよう。

「朝鮮通信使と訳官使—2つの使節と対馬藩」

発表

石田 徹 氏(島根県立大学教授)

朝鮮王朝は、徳川将軍に派遣したよく知られる通信使の他に、対馬宗家に対しても「訳官使（問慰行）」という使節を派遣していた。小規模ながら幕末まで派遣された訳官使は19世紀の日朝関係を支えていたといえよう。

「朝鮮通信使の称号に込められた意味」

発表

木村 拓 氏(中央大学教授)

12回にわたり派遣された朝鮮通信使のうち、1回目から3回目までの使節は「回答兼刷還使」と称していた。これは、3回目までは日本を「交隣」の対象とみていなかったということであり、使節の称号の変遷を通じて、朝鮮側の対日外交姿勢の変化を読み取ることができる。



第2部では、4人の研究者がそれぞれの発表内容について意見の交換を行ったほか、会場、またオンラインでの参加者との間で質疑応答を行いました。その例をいくつかご紹介します。

質問：かつて対馬藩が果たしていた日韓をつなぐような役割を、現代において誰が果たすべきか？

回答(田代氏)：国際関係ということかつては欧米中心の見方が主流だったが、今はアジアに目が向けられるようになってきた。まず我々一人一人が相手を知るということが重要ではないか。

質問：朝鮮通信使の『智恵』を現代の外交関係に当てはめるとどのようなことになるだろうか？

回答(吉田氏)：歴史をそのまま現代に当てはめることは難しいが、異文化を異文化として受け止め、相手を理解しようとするのが大事なのではないか。

3時間半にわたるシンポジウムへの参加を通じ、朝鮮通信使の新たな一面、現代につながるヒントについて多くの参加者の方々が思いを馳せる機会となりました。

詳細は
こちらから



日韓国交正常化60周年記念 特別講演会

西野純也さん（慶應義塾大学法学部教授、同大学東アジア研究所所長）、斎藤真理子さん（韓国語翻訳者）を講師に迎え、2025年3月と9月に会場/オンラインのハイブリッド形式での特別講演会を開催しました。

3月1日開催

特別講演会

「日韓国交正常化60周年と日韓交流」

講師：西野 純也 さん

（慶應義塾大学法学部教授、同大学東アジア研究所所長）



日韓関係の60年を振り返り、日韓交流の課題や今後の展望などについてのお話のほか、世論調査結果から読み取れる両国国民の相手国への認識への変化、世代間の意識の差についてくわしくご紹介いただきました。

講演とほぼ同時間を質疑応答にあて、参加者との意見交換も行いました。

実際に日韓交流活動を行っている若い世代を中心に「若い世代が日韓交流に関わる意義、若い世代だからこそ知っておくべきことは何か」、「日韓交流自体に関心がなく、韓国への偏見を持つような人にどのようにアプローチすればよいか」などの質問が挙がりました。

参加者の感想紹介

- 日韓関係の大きな契機となる歴史的出来事から政治外交の動きを改めて振り返り、また最新の日韓世論調査について理解できる大変良い機会となりました。
- 学生交流団体として活動していますが、私たちが前向きに交流したことが10年後20年後の日韓関係に意味を持つのだろうかと考えることがありました。世代によって日韓関係への意識が違うのは経験した出来事が異なるからであるというお話、現代の若者世代が現役世代となったとき日韓関係が何か変わるかもしれないという話を伺い、私たちが今活動していることは決して意味のないものではないのだと感ずることができました。日韓関係を牽引していく存在を育成することももちろん必要であると考えますが、世論を形成する国民の意識を少しずつでも変えていくこともまた重要であり、私たちが活動を続けることでいつの日か変化が生じるのではないかと思います。



詳細はこちらから

9月7日開催

特別講演会

「隣の国の人々と出会う～私と韓国」

講師：斎藤 真理子 さん

（韓国語翻訳者）



文学を通じた韓国理解を軸に、ご自身の「隣の国の人々との出会い」から、韓国文学を支える近現代史の背景に至るまで、時にユーモアを交えながら語っていただきました。また、今回の講演にあわせてご準備いただいた韓国文学のブックガイドをもとに、「情」と「理」という2つの観点から、代表的な文学作品を紹介していただきました。

後半は質疑応答の時間が設けられ、オンライン参加者を含め、多くの質問が寄せられました。「古典を含め、韓国文学を映画化した作品でお勧めのものは」との質問には、斎藤さんの呼びかけで、参加者と自由に意見を交わす場面も見られました。そのほか、「韓国の本を選ぶ際の基準」や「翻訳者を目指す人へのアドバイス」など、熱心な質問が続き、関心の高さがうかがえました。

参加者の感想紹介

- 講演はとてもわかりやすく、文学の持つ力を改めて実感する機会となりました。海外の本を読むことは、その国の知恵や人々に会い、一緒に船に乗って旅をするようなものだというお話が印象に残っています。
- これまで多くの韓国の文学作品が紹介されてきましたが、読んでみたい作品は増えていくものの、時代背景や思想が難しく、なかなか手に取ることができずにいました。今回の講演でのお話を通じて、その難しさが少し解きほぐれたように思います。
- 困難な時代をエネルギーに生き抜いてきた韓国の小説の登場人物のように、私もくじけず、絶望せずに生きていこうと思いました。



詳細はこちらから

両講演会とも多くの方にご参加いただきました。終了後に会場で開催した懇親会では、講師との懇談に加え、参加者同士が自身の交流活動や関心事を語り合う姿が見受けられました。

トークセッション 「国交正常化60周年とこれからの日韓交流」

12月23日、日韓国交正常化60周年記念事業として、トークセッション「国交正常化60周年とこれからの日韓交流」を東京都内で開催しました。

この行事は、日頃、日韓間の各種交流団体で活動している学生や、当基金大学生訪韓団OBOGなどの日本の若者、また韓国から来日した「韓国ニューリーダー訪日団」団員の大学生32名に、国交正常化以降60年間の日韓関係を踏まえ、今後の両国間交流について議論していただくことを目的に企画したものです。

行事の冒頭では、今回の会場である「国際文化会館」で特別顧問を務める朴喆熙（パク・チョルヒ）前駐日韓国大使が、会場に参加した若者たちに「将来の日韓関係を担う皆さんに期待する」旨の応援のメッセージを送っていただきました。



小倉和夫国際交流基金顧問による基調講演

第1部では、外交官として日韓関係に長く携われ、駐韓国大使も務められた国際交流基金顧問の小倉和夫さんより、若者たちが両国の未来を考えるにあたっての歴史を知ることの重要性や、押さえるべきポイントなどについて、実例をあげつつご講演いただきました。

また、共に韓国・高麗大学に在学中の田邊暉衣さんと伊藤晃輝さんは、日韓関係にまつわる自身の留学生としての体験や思いを、関連するエピソードを交えて発表していただきました。

第2部では、モデレーターの早稲田大学教授 金敬黙（キム・ギョムク）さんの進行の下、会場に参加した日韓の若者たち約60名が、両国関係の課題や交流活動の目指すべき方向性などについて語り合いました。

冒頭、金教授は、田邊さんからの「日韓ラグビー交流」についての発表に言及しつつ、「日韓関係における『ノーサイド』は、どこに見出すべきだろうか」と参加者一同に問いかけました。

その後も金教授は、「皆さんがこれまでも体験してきたであろう交流事業における『出会い』と、『その後数か月間のSNS上でのやり取り』で終わってしまう、交流の限界を克服するには？」「両国民の心を動かす感動的なエピソードは、スポーツ選手等の有名人によってしか作り出されないのか？皆さん自身、あるいは周囲にそのような題材は存在しないのか？」といったサジェスチョ

ンを続けざまに投げかけられ、これに対し参加者からは、二度にわたる日韓合同の小グループ（7～8人）に分かれての議論（それぞれ15分程度）も交えつつ、下記のような意見が述べられました。

- 自分がこれまで参加してきた日韓の交流行事では、争いを避けるために、敏感な内容については触れないようにしてきた。しかし、真の理解のためにはこれらについての議論も必要。



日韓合同の小グループで議論を交わす

- 敏感な問題について議論するプログラムに参加し、課題を避けずに向き合うことの重要性を実感した。他方で、問題を意識しない方が関係はよくなるのではないかと、という矛盾した考えも拭いきれない。
- 自身の韓国への留学をきっかけに、「嫌韓」だった家族が次第に韓国について理解を示し、関心も持つようになった。
- 日本人の友人をソウル市内で案内した際、歴史をめぐっての微妙な感情のすれ違いを感じた。
- 戦前に韓国で生まれ育った祖父が80年ぶりに韓国を訪れ、かつて暮らした家の現在の住人（1940年代に日本で生まれた方）と語り合いながら共に涙する場に立ち会った。国を超えた「人同士の歴史」を実感した。
- 情熱をもって交流を進めている自分たちの活動を広く知ってもらおうことが、敏感な問題についても率直な意見の交換を可能とする雰囲気を作り出すことになり、ひいては両国関係の安定につながるのではないかと。

セッションの終盤、金教授からは、歴史を国と国の間だけでなく、「家族、個人の関係におとし込んで眺めてみる、そしてその体験を周囲と共有する」ことの重要性が指摘されました。そのような作業を通じ、「国と国との間の風通しを良くする」ことで、「たとえけんかをしてでも対話を続けることのできる関係」をデザインしていくことが、「日韓間の『ノーサイド』につながるのではないか」との整理が示され、2時間半に及び議論は幕を下ろしました。

その後、日韓の若者たちは夕食を共にしながら引き続き語り合い、親交を深めました。

日韓文化交流基金では、今回のような日韓の若者たちの真剣な「対話の場」を引き続き提供していきたいと考えています。

詳細は
こちらから



大学生交流事業

韓国青年訪日団第1団

(テーマ：福島と北海道における日韓交流)

2025年7月、韓国青年訪日団第1団（大学生）一行30名が福島と北海道を訪れ、地元の方々と交流するさまざまなプログラムに参加し、大きな成果を収めました。その様子をダイジェストでお届けいたします。



「NPO 法人ふくかんねっと」
鄭鉉淑(チョン・ヒョンスク)理事長の講義聴講

前半日程では福島県を訪問しました。県庁を表敬し、県議会日韓友好議員連盟の議員お二方から両国国旗が入った特注の白河だるまをいただき、県職員の方から県の概要と東日本大震災からの復興についてのレクチャーを受けました。質疑応答では、「復興のための法的支援はあるのか」、「日本国内で福島はどのように認識されているか」、避難された被災者の帰還率、復興における優先順位など、時間が足りなくなるほどたくさんの質問が出されましたが、どの質問にも率直かつ丁寧な回答をしていただき、大変有意義な意見交換の場となりました。

同世代同士の交流も実施しました。福島大学を訪問し、キャンパスツアー、学食、赤べこ絵付け体験などを通じて学生の皆さんと終日交流しました。韓国人との交流が初めてだったという福島大学の学生の皆さんも多く、日韓双方の学生たちが一生の思い出になったと熱く語り合う様子が印象的でした。



福島大学の学生の皆さんと赤べこ絵付け体験

また、大学生訪韓団OBOGをはじめとした地元の大學生たちと会津若松市でフィールドワークも実施しました。交流しながら、鶴ヶ城、会津武家屋敷、七日町通り、飯盛山エリアを巡り、会津の歴史と文化を学びました。

さらに、福島と韓国の交流に25年以上ご尽力された「NPO法人ふくかんねっと」が市民の皆さんとの夏祭りを開催してくださいました。韓国語を学ぶ中学生から70代までさまざまな年代の方々 30名程が集まり、団員たちとともに、流しそうめん、



福島市民の皆さんとの交流会

お好み焼き、焼き鳥、かき氷、桃などを味わった後、全員で盆踊りに参加し、大いに盛り上がりました。これぞ草の根市民交流の素晴らしさ。このような福島での温か

日付	訪日団 日程紹介
7/8	仙台空港から入国、オリエンテーション、【講義】外務省
7/9	福島県へ移動、【表敬・講義】福島県庁 【講義】NPO法人ふくかんねっと 理事長 鄭鉉淑氏
7/10	【学校訪問・交流】福島大学
7/11	【視察・交流】福島近郊の学生と共に 会津若松エリアフィールドワーク 【交流】福島市民との交流会
7/12	北海道へ移動、ホームステイ対面式後、ホームステイへ
7/13	終日ホームステイ
7/14	【学校訪問・交流】北海道教育大学札幌校
7/15	【表敬・講義】北海道庁【表敬・講義】駐札幌大韓民国総領事館 【視察】日韓野球交流の現場、アクションプラン・感想発表会
7/16	新千歳空港から出国

い歓迎に、団員たちも感動し、福島への理解が深くなったことはもちろん、すっかり福島のファンになりました。

後半日程では、北海道を訪問しました。札幌で2泊3日のホームステイを行い、北海道教育大学札幌校で同世代交流を実施しました。特筆すべきは、大学訪問時



ホストファミリーと

に実施した意見交換の場です。同大学学生が、日韓の歴史問題における韓国側の立場を理解するために訪韓してさまざまな施設を訪問した際の感想を伝えつつ、「日韓の友好を築くためには文化や若者の交流のみならず、歴史認識や歴史観にも焦点を当てるべきで、そのためには教育現場でこれらの事実をいかに伝えていくかが重要ではないか」と締めくくり、団員たちから大いに共感を得て、熱い意見交換が展開されました。

さまざまな交流を終えた団員たちは感想発表会において「福島に行って大丈夫かといった周囲の否定的な声も多く、自分も正直怖いと思う部分があったが、実際に訪れると韓国でのイメージと正反対の姿がそこにあり、福島の人々と触れあい、誤解を払拭することができた」、「福島は既に復興しており、その回復力に驚き、食べ物も世界で一番厳格な基準値で徹底的に検査をしている事実も知った。これらのことを帰国後にしっかり伝えていきたい」、「福島の良さを積極的に発信したい」と何人も力強く語ってくれました。また、北海道教育大学での交流において日韓の歴史問題について日本側が発表した内容に言及する発表も多く、「センシティブな問題ではあるが、日韓の若者がお互い学び合いながら持続的な意見交換をしていくことが大切であると感じた。沈黙が一番いけない」と真摯に語る団員もいました。

今回の訪日団は、毎日のように新たな出会いと交流があり、行く先々で大きな歓迎、活発な意見交換、濃密な交流が展開され、日韓国交正常化60周年に相応しい、実り多い訪日団となりました。

詳細はこちらから
(訪日団リポート)



教員交流事業 後続交流への広がり

日韓両国の小・中・高・特別支援学校の教員を対象とした「日韓学術文化交流事業」は、毎年6月に韓国の教員を日本に招へいする訪日団、8月に日本の教員を韓国に派遣する訪韓団を実施しています。日韓の教員同士の交流は、オンライン・対面交流を経て後続交流へと広がりを見せています。



韓国の教員が訪日中に訪問した月島第一小学校(東京都中央区)の教職員との座談会の様子



韓国の教員が訪日中に高麗川小学校(埼玉県日高市)で模擬授業を実施した様子

2025年度の教員訪日団は6月3日から11日までの8泊9日間、「日韓国交正常化60周年、日韓交流の足跡探訪及び日本の教育現場視察」というテーマの下、初等学校(小学校)の教員を中心とする第1団と中学校・高等学校の教員等で構成される第2団の計95名を迎え、埼玉県、栃木県、群馬県、茨城県を訪問しました。一行は文部科学省による講義聴講、各種学校や教育関連施設の視察等を通じて、日本の教育政策や教育現場に対する知見を得るとともに、一般家庭でのホーム

ステイ等を通じて、日本の社会や文化に対する理解を深めました。また、埼玉県日高市所在の高麗神社視察では、古代の朝鮮半島とゆかりのある旧高麗郡の歴史に触れる機会をもちました。

8月20日から26日までの6泊7日の日程で実施した教員訪韓団では、訪日団と同様、第1団は小学校の教員、第2団は中学校・高等学校の教員を中心に構成され、計65名がソウル特別市、京畿道等を訪問しました。訪韓中の学校訪問では、韓国の児童や生徒に向けて日本文化等に関する模擬授業を実施したり、教職員との意見交換会を行ったりすることで、日韓間における相互理解の増進に寄与する機会となりました。



日本の教員が訪韓中にソウルへ入り初中等学校で模擬授業を実施した様子

また、「日韓学術文化交流事業」は訪日・訪韓事業のみにとどまることなく、2024年度以降、訪日団と訪韓団の間の期間に、オンライン交流を1回、教員訪韓団実施期間中に対面交流を1回、訪韓団実施後に再度オンライン交流を1回、計3回の日韓の団員間交流事業を展開しています。これはコロナ禍に実施した「日韓教員オンライン交流プログラム」に着想を得て、コロナ禍以前はそれぞれ独立した事業として実施していた教員訪日・訪韓事業を改編したものです。日韓の教員が訪日・訪韓事業への参加を通じて見聞を深めた内容に

日付	日程紹介(抜粋)
訪日団 6/3 ~ 6/11	【講義】文部科学省 【視察】李秀賢氏追悼・顕彰碑含む新大久保フィールドワーク
	【学校訪問・交流】第1回：中央区立月島第一小学校 日高市立高麗川小学校
	【学校訪問・交流】第2回：府中市立府中第四中学校 茨城県立竹園高等学校
	【視察・講義】高麗神社、ホームステイ、成果報告会
7/19	【オンライン交流】日韓学術文化交流事業訪日/訪韓団 参加者間のオンライン交流プログラム
訪韓団 8/20 ~ 8/26	【学校訪問・交流】第1回：富川東初等学校、第2回：水原工業高等学校
	【学校訪問・交流】ソウルへ入り中等学校
	【対面交流】ホームステイ(訪日団参加教員などのお宅に訪問)
	【講義聴講】韓国教育部 【視察】坡州非武装地帯(DMZ)、成果報告会
12/6	【オンライン交流】日韓学術文化交流事業訪日/訪韓団 参加者間のオンライン交流プログラム

ついて、勤務校での授業や同僚等に還元するだけでなく、教員自身が日韓交流の楽しさや重要性について実感することで、児童や生徒同士の交流へと日韓交流の輪が広がっていくことを後押ししています。

2025年度の1回目の日韓教員交流は、7月中旬に訪韓団のオンライン事前説明会とあわせて実施しました。交流中は小・中・高など学校種別に20のグループに分かれ、韓国の教員が訪日団で日本の学校を視察した際に感じたことに始まり、教授法、教材、勤務環境、保護者対応等、日韓両国の教育に関する類似点や相違点を中心に意見交換を行うことで、互いに相手国に対する関心を高めるとともに、翌月に控えた対面交流への期待に胸を膨らませました。

待ちに待った2回目の交流は、日本教員訪韓時のホームステイの形で実現しました。本事業の韓国側事務局を務める韓国国立国際教育院の尽力により、教員訪韓団参加者のホームステイ先の半分程度が教員訪日団参加者の家庭だったのです。韓国の教員の自宅に寝食を共にすることで、教育以外にも、韓国の社会や文化を知ることのできる実に多種多様な交流が繰り広げられ、真の友情が育まれました。

最後の3回目の交流(12月開催)では、「教員間の親睦を深めること」と「学校間交流の相手探し」という目的を明確に分けたことで、公式行事終了後の自主的な後続交流につながりつつあります。すでに学校間交流が始まっているケースもあり、本事業は日韓交流人口のすそ野拡大に貢献しています。



日本の教員が訪韓中に訪日団参加者の韓国教員の家でホームステイを実施



訪日・訪韓後の日韓教員オンライン交流の様子

訪日団
レポートは
こちらから



訪韓団
レポートは
こちらから



後続交流事例は
こちらから



高校生交流事業

職業系高校に通う生徒たちの交流（テーマ：農業）

2025年度の高校生事業のうち、昨年度からスタートした職業系高校生交流を紹介いたします。今年は「農業」をテーマに、訪日団/訪韓団の相互交流を実施しました。

〔職業系高校生訪日団〕

韓国の農業系高等学校に通う生徒たち約50名の主な訪問地は和歌山県でした。フルーツ王国と呼ばれている和歌山県。訪日団の訪問時期である9月下旬には、ぶどう・柿が旬の時期で、農家の方から苦勞されている点やより良いものを収穫するために努力されていることなどについて伺い、実際に収穫体験も行いました。ぶどう農家では、紙袋に覆われたぶどう一房ひと房を下から覗き込みながら、収穫物が市場に出回るまでの苦勞を実感し、柿農家では日本にしかない品種の大ぶりな柿を特別



米農家視察の際、団員がコンバインを操縦させてもらっている様子



和歌山県立南部高等学校訪問の様子

に収穫させていただきました。また、ちょうど稲刈りの時期だったこともあり、コンバインを使った稲刈り体験も行い、ある生徒は「授業で日本の有名な農機メーカーのコンバインについて習ったが、実際に稲刈りをしている様子を見ることができて嬉しい」と話していました。

また、相互交流として実施する職業系高校生訪韓団の派遣校である和歌山県立南部高等学校も訪問し、校内施設（農場・果樹園・牧場・加工施設など）を見学しながら、日本の農業高校の特色について学びました。昼食時には、調理コースの皆さんが作ってくれたお弁当を食べながら、学校生活や両国で流行っていることなどについて語り合いました。最初のうちは恥ずかしがっていた生徒たちも、次第に打ち解けていき、笑い声の絶えない一日となりました。

南部高校があるみなべ町は、梅の生産量日本一であり、世界農業遺産「みなべ・田辺の梅システム」に認定されている地域です。特に、梅の代表品種として知られる「南高梅」は南部高校（通称「南高（なんこう）」）にゆかりのある銘柄だそうです。当時同校に勤務されていた竹中勝太郎教諭が梅の優良系統調査に尽力され、そ

日付	日程紹介（抜粋）
訪日団 9/21 9/27	【講義】日韓関係について 【テーマ視察】ぶどう農家、米農家、柿農家（農作業体験含む）
	【学校訪問・交流】和歌山県立南部高等学校
訪韓団 11/19 11/25	【講義】世界農業遺産「みなべ・田辺の梅システム」について 【テーマ視察】みなべ町うめ振興館、ホームステイ、成果報告会
	【学校訪問・交流】水原農生命科学高等学校（2日間実施）
	【視察】ソウル農業博物館、ホームステイ 【視察】坡州非武装地帯（DMZ） 現代モータースタジオ高陽 【視察・交流】景福宮、成果報告会

の調査に園芸科の生徒たちが協力したことから、「南高」の名を世に広めたいと思いを込めて名付けられたそうです。団員たちはこのエピソードに感心していました。

〔職業系高校生訪韓団〕



水原農生命科学高等学校訪問時、模型を組み立てながらスマートファームの設備について学ぶ様子

前述の南部高校の生徒約50名からなる職業系高校生訪韓団は、ソウル農業博物館（農業共同組合中央会設立）にて韓国農業の歴史について学んだほか、二日間の水原農生命科学高等学校訪問を通じ、韓国の生徒と多種多

様なプロジェクトを行いながら現代の韓国農業について学びました。特にスマートファームを選択した生徒たちは、初日にアジア最大規模のスマートファームを運営している韓国企業を訪問し、スマートファームについての講義を受けたほか、実際に出荷されるまでの工程を見学させていただきました。2日目には実際にプラスチックの模型と基盤を組み立て、育てたい植物の生育環境を調査し、パソコン操作で温度や湿度を管理することのできるプログラム作りを行いました。プログラミング作り



プロジェクト発表の様子

に苦戦したり、ケーブルが指定場所に入らなかったりと、グループ毎に異なるポイントでつまづいていましたが、どのグループもチームワークを発揮し時間内に完成させ、プロジェクトに関する発表を行いました。

2日間の交流を通し、両国の生徒たちからは、言葉での意思伝達に苦勞したものの日本と韓国との文化の違いや考え方の違いについて知るきっかけになったという声が多く聞かれました。いつか彼らが実際に野菜を作ることになった時、日韓で共同プロジェクトを実施するなど、今回の交流から発展した何かが生まれてくれればと思います。

訪日団
レポートは
こちらから



訪韓団
レポートは
こちらから



大学生交流事業

日本国外務省・大韓民国外交部主催 相互派遣事業

「日韓外交正常化60周年～両手を携え、より良い未来へ～」をテーマに、日韓両国の外交当局による相互派遣形式の訪日・訪韓団を実施しました。

本事業では対面形式の交流のほかにもそれぞれの訪日、訪韓を前後して計2回のオンライン交流を実施し、日韓の参加者同士が交流できる機会を合計4回設けました。

【オンラインでの初対面】

初回は9月20日にオンラインで実施し、日韓それぞれ4名ずつ7つのグループに分かれてZoomを使用して交流しました。オンラインでの初対面ということもあり、初めは少し緊張した様子も見られましたが、自己紹介等を通じてお互いの関心事や共通点を見つけながら親睦を深めていました。

【大学生訪韓団】

10月10日から8泊9日の日程で実施した訪韓団では、ソウルでグループごとにフィールドワークを実施しました。オンラインで一度交流をしていたこともあり、韓国の学生が集合場所の会議室に入ってくるとお互いに手を振り合って、再会を喜んでいました。フィールドワークが始まる前にアイスブレイクの時間がありましたが、数週間前に初めて会った同士とは思えないほど、とても楽しそうに話をしていた姿が印象的でした。



フィールドワークを通じて、学生からは「政治やメディアを通して抱いていた韓国のイメージがいかにか一面的だったかに気づかされた。直接の対話が、偏見を取り除く最も有効な



【対面交流】ソウルでのグループ別プロジェクトの様子

手段であることを実感した瞬間だった」「小さなことではあるが、私たちのように実際に出会い、コミュニケーションを取るという経験が両国関係に重要であると思った。今回の交流はお互いの文化を理解し、友情を築く大切な経験であり、この縁を今後もつなげていきたい」といった感想が

日付	日程紹介 (抜粋)
9/20	【オンライン交流】韓国大学生訪日団／大学生訪韓団 参加者間のオンライン交流プログラム
訪韓団 10/10 ～ 10/18	【対面交流】韓国大学生訪日団団員とのグループ別プロジェクト準備及びフィールドワーク
	【交流】「日韓交流おまつり2025 in Seoul」参加
	【表敬】韓国外交部
	【表敬】在大韓民国日本国大使館公報文化院 【大学訪問・講義・交流】高麗大学 ホームステイ、故 李秀賢氏墓地参拝、成果報告会
10/25	【オンライン交流】韓国大学生訪日団／大学生訪韓団 参加者間のオンライン交流プログラム
訪日団 11/5 ～ 11/13	【表敬・講義】外務省【視察】駐日韓国大使館韓国文化院 【学校訪問・交流】明治大学
	【対面交流・視察】李秀賢氏追悼・顕彰碑含む新大久保フィールドワーク、 大学生訪韓団団員とのグループ別プロジェクト準備及び発表
	【視察・講義】高麗神社、ホームステイ、成果報告会

あり、実際に会って対話することの重要性を再確認したようでした。

＼日韓交流おまつり2025 in Seoul /

団員たちは、訪韓期間中の10月12日にソウル・COEX Bホールで開催された「日韓交流おまつり2025 in Seoul」において、「和柄のしおり作り」と「日本のマナー&文化クイズ」の2つのプログラムからなるブースを運営し、来場した韓国の方々に日本文化を紹介しました。

「和柄のしおり作り」ではしおりの形をした台紙にさまざまな柄の和紙を自由に切り貼りして、来場者のみなさんに世界で1つのオリジナルしおりを作ってもらいました。



【日韓交流おまつり2025 in Seoul】でのブース運営

また、日本のマナー&文化クイズでは団員たちが来場者の方々にクイズ形式で日本と韓国の文化の違いについて説明し、好評を得ていました。

【大学生訪日団】

11月5日から8泊9日の日程で実施した訪日団でも、日韓の参加者同士での交流を実施しました。東京・新大久保でのグループごとのフィールドワークを実施



【対面交流】新大久保でのグループ別プロジェクト発表の様子

した後、「少子高齢化問題」などの日韓両国に共通する社会課題や文化の違いなどをグループごとに話し合い、最後に発表の場を設けました。非常に充実した発表内容とチームワークの良さから、全4回の交流機会を経て日韓の参加者たちがより深く理解しあったことが感じられました。

訪韓団
リポートは
こちらから



訪日団
リポートは
こちらから



当基金主催の大学生訪韓団OBOGにより結成されたJKAF (Japan Korea Alumni Forum) は、みずからの交流事業参加体験を生かした活動を継続して行っています。

JKAF (Japan Korea Alumni Forum) 大学生訪韓団OBOG組織



代表挨拶 手塚 瑞葵 (北海学園大学4年)

JKAF (Japan Korea Alumni Forum) は、日韓の青少年交流事業の参加経験者を中心に設立された団体であり、「交流を一度きりで終わらせない」という思いのもと、両国の若者が再び集い、学び、共に成長する場をつくることを目的としています。これまで私たちは、「日韓交流おまつり in Tokyo」への参加や日韓次世代会議の開催、オンラインディスカッションなどを通して、草の根レベルでの相互理解と友情の深化に努めてまいりました。

活動を重ねる中で改めて感じるのは、「交流」は単に異文化を知ることではなく、自国の文化や社会を見つめ直す機会でもあるということです。日本と韓国、異なる価値観や歴史的背景を持つ両国だからこそ、対話を通じて新しい視点を得ることができます。私たちは、そうした若者同士の“つながり”が、将来のより良い日韓関係を築く基盤になると信じています。

今後もJKAFは、過去の交流を未来へつなげる懸け橋として、メンバー一人ひとりが互いに学び合い、社会に貢献できる活動を続けてまいります。これまでご支援を賜った関係者の皆さま、そして共に歩むすべての仲間に、改めて感謝申し上げます。

これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

年間活動計画 (2025年4月～2026年3月)

2025年

- 5月 報告会兼同窓会
- 8月 オンライン交流 with KJAFB*
- 9月 日韓交流おまつり 2025 in Tokyo
- 10月 オンライン交流 with KJAFB*
- 11月 日韓次世代会議 with JKAF**

2026年

- 1月 日韓次世代会議 with KJAFB

*KJAFB：釜山地域の大学生訪日団OBOG組織
**JKAF：ソウル地域の大学生訪日団OBOG組織



日韓交流おまつり2025 in Tokyo

2025年9月27～28日の2日間、東京にて「日韓交流おまつり」が開催されました。日韓文化交流基金とJKAFのブースでは、「韓国の若者と語ろう」と「高句麗古代装束試着体験」の二つのコーナーを運営しましたが、多くの方々にお立ち寄りいただき、心より御礼申し上げます。ブースには、2日間で延べ600名を超える来場者にお越しいただきました。

「韓国の若者と語ろう」コーナーでは、JKAFのメンバー20人が韓国から来日した訪日団メンバーと共に運営を行いました。幅広い年代の来場者からは、「話を聞いて韓国に行きたくなった」「交流を通して韓国についてより理解を深めるきっかけになった」「実際に韓国の若者と話せて貴重な体験だった」といった感想が寄せられ、終始温かく活気に満ちた雰囲気の中で懇談が続きました。

また、「高句麗古代装束試着体験」コーナーも好評を博し、多くの来場者が韓国の伝統衣装を体験しました。真夏のような暑さにもかかわらず、参加者が楽しそうに衣装を着用する姿を見て、スタッフ一同大変嬉しく思いました。

今回のイベントを通じて、参加者・団体メンバー・ボランティアが一体となり、日韓の文化・世代を超えた交流の場を創出できたことは、JKAFの理念である「交流を一度きりで終わらせない」を具現化する大きな一歩となりました。

改めまして、ご来場いただいた皆さま、運営を支えてくださったボランティアの皆さまに深く感謝申し上げます。JKAFは今後も、皆さまに楽しんでいただきながら、日韓間の理解と友情を深めるイベントを企画してまいります。次回もぜひ、会場でお会いできることを楽しみにしています。



JKAFインスタグラムも
ぜひフォローしてください



日韓文化交流基金賛助会員制度のご案内

公益財団法人日韓文化交流基金では賛助会員制度を設けております。
会員の皆さまからいただいた会費は、講演会や助成事業などを通じて日韓間の相互理解促進のために活用しております。
皆さまのご入会を心よりお待ちしております。

賛助会員制度の
詳細やお申込みは
こちらから



賛助会員リスト ご厚意に深く感謝申し上げます。

特別会員 (6名)

小野正昭(3) 鹿取克章(3) 古賀信行(3) 中江新(3)
馬定延(3) 渡辺浩(3)

個人会員 (40名)

阿部孝哉 安倍誠 飯島渉 磯崎典世 稲葉真岐子 林在圭
内田富夫 長久光 菅野修一 姜英淑 木畑洋一 小林直人
小針進 高麗文康 坂井俊樹 阪田恭代 酒匂康裕 櫻井浩
佐藤俊行 白川豊 塚本壮一
陽清学園・津谷正毅 都恩珍 西澤豊 波田野節子
墨の美術館・濱崎道子
日本民藝館・館長深澤直人 福原裕二
藤田昭造 藤本幸夫 堀泰三 實生泰介 松井貞夫(2) 三浦むつ子
向修一 茂木敏夫 吉岡雅子 余田幸夫 和田とも美 匿名希望(1名)

法人会員 (1団体)

和光物産株式会社 (5)

*2025年有効会員、五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数

賛助会員制度の種類と会費について

- 年会費 1口1万円
 - (1) 個人会員 1口以上
 - (2) 特別会員 3口以上
 - (3) 法人会員 5口以上
 会員としての有効期間は、会費の入金日から1年間です。
- ◆ 賛助会員制度における会費は、税法上は公益法人等に対する寄附金として扱われるため、寄附金控除を受けることができます。
- 郵便振替
 - 座番号 00160-9-668460
 - 座名称 公益財団法人日韓文化交流基金
- 銀行振込
 - ゆうちょ銀行 ○○八支店 普通口座
 - 座番号 8505617
 - 座名義 公益財団法人日韓文化交流基金
フリガナ ザイ) ニッカンプンカコウリュウキケン
(手数料は当基金にて負担いたします)

第25回日韓歴史家会議開催

日韓両国の歴史家26名の参加による、第25回日韓歴史家会議が2025年11月14日から3日間、「噂とフェイクニュース(誤情報)の歴史」をテーマに韓国ソウルで開催され、当基金が日本側事務局を担いました。会議初日には、日韓国交正常化60周年記念講演会を開催し、宮嶋博史(東京大学・成均館大学名誉教授)と金鉉球(キム・ヒョング)(高麗大学名誉教授)がそれぞれの歴史家としての歩みについて話されました。



本会議は、日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」とすることを目的として、2001年の第1回以来、日本史、韓国史のみならず、ヨーロッパ史、経済史など多様な分野を専門とする両国の歴史研究者が集い、最新の研究成果の報告とそれに基づく意見交換を行っています。

講演会の内容を含む今回の会議の報告書は、2026年春ごろまでに当基金ウェブサイト上で公開する予定です。

日韓歴史家会議の
詳細はこちらから



第38回日韓文化交流基金代表訪韓団

当基金の古賀信行会長をはじめ、理事・評議員から構成される代表訪韓団が、2025年9月24日から26日までの日程で韓国を訪問しました。韓国の要人ならびに関係する各機関の方々と、共同で実施する各種交流事業などについて活発に意見交換を行いました。